

尾崎一雄全集

第四卷

尾崎一雄全集

第四卷

尾崎一雄全集第四卷

昭和五十七年八月二十五日初版第一刷發行

著 者 尾 崎 一 雄

發行者 布川角左衛門

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—九一

電話 東京(291)七六五一(營業)

東京(294)六七二(編集)

振替 東京 六一四一二三

印刷 株式會社精興社

製本 株式會社鈴木製本所

落丁・亂丁本はお取替致します

目次

芳兵衛物語	三
彌次喜多開店記	一六
小鳥の聲	一八
トラの話	一九
冬眠居閑談	二〇
霖雨	二五
質屋について	三三
梅の咲く村にて	三三
むかでとネズミ	三七
多木太一の怒り	三五

縄帯の男	四一〇
家常茶飯	四二四
列の中の顔	四四九
もぐら横丁	四七一
あとがき	五二七
後記	五二九

尾崎一雄全集 第四卷

芳兵衛物語

第一部 岐れ路

一

東京牛込馬場下町、同じく高田町、また淀橋區戸塚町の三ヶ町が境を接する地點に、人通り頻繁な四つ角がある。そこは、八幡坂下、又は、穴八幡前と云はれた。——現在も多分さう稱ばれてゐるであらう。この話の發端は、今から二十年程前、即ち、昭和六、七年の昔にさかのぼる。したがつて、今は無い牛込とか淀橋とかいふ區名が出てくるのである。——

ここで直角に交叉する二つの道路は、南北に通ずる方が堂々たる幅員と立派な舗装とを持ち、東西に

走る方は、——前者を一流とすれば、先づ三流位のところであらう。南から北へ、即ち、馬場下町から戸塚町方面へ走る道は、この四つ角の地點から、登りになつてゐる。その登り坂の左手に、穴八幡といふ神社がある。——都の西北とうたはれる學校に縁故のある人なら、判つた、もうくどい、と云ふだらうが、讀者はさういふ人ばかりではないに決つてゐるから、もう少しづづける。——穴八幡神社は、蟲封じといふまじなひで知られてゐる。(一説には、隣の某社が某寺かが本家だともいふが、蟲封じの本家争ひには興味が無いから、これ以上考へない。)昔、夏目漱石といふ小説家が、「吾輩は猫である」などといふ滑稽小説を書くかたはら、ひどく癪癪を起すので、夫人が堪りかね、この蟲封じのお札をひそかに貰つて來たとか來なかつたとか、そんな噂話もあつたと記憶する。

穴八幡と三流的道路をはさんでは早稻田第一高等學院、一流的道路をはさんでは、人家の一ならびを越えて水稻荷、更に早稻田大學がある。そして、穴八幡と對角をなす地點に早稻田中學があるが、その早稻田中學は、直接道路に接してゐるわけではない。やはり一ならびの商家を周邊に持つてゐる。その商家群の一軒に、春光館といふ安下宿があつた。四つ角から數へて、三軒目位だつたらう。この一角の突端は、一朝庵といふ古い蕎麥屋が占めてゐる。

春光館の一番奥の六疊、二階の東南隅の部屋に、多木太一三十三歳、妻(正確には内縁の妻)芳枝十九歳といふ一組がゐた。一緒になりたてのほやほやであつた。年齢は算へ年である。

多木太一には、定職がなかつた。早稻田大學の文科を出たのは數年前だが、以來これと云つて職に就いたことがない。就職難時代だつたかも知れぬ。しかし案外さうでなかつたかも知れない。多木太一は、就職については無關心だつたから、そんなことは一向知らず、また、氣にもならなかつたのである。

三十三の今日になるまで、彼は、たつた一度だけ就職のための履歴書といふものを書いたことがある。二年近く前のことだ。彼が、三年ばかり一緒に暮した前の妻と別れて、悪夢から醒めたやうにはツとし、つぎ置ききのビールのやうに氣が抜け、枯野で一人風に吹かれてゐるやうな味氣ない氣持でゐた時、所在なさに學校時代のある友人を訪ねた。あるひは金でも借りに行つたのかも知れない。それは分明でないが、とにかくその友人と話してゐるうち、よし、俺も勤め人になつてみようと思ひついたのである。

島田といふ友人だつた。島田は佛蘭西文學をやり、多木太一と同期に大學を出たが、在學中から詩を書いてゐた。X門下では指折りと云はれ、學校を出ると、Xの世話で、東京市の吏員になつたが、詩作はやめなかつた。彼は小綺麗な家に、着飾らせた細君と、女中の三人で暮してゐた。

「書いてゐるかい？」と島田が云つた。さういふ彼の目付には、いくらかの皮肉と侮蔑とそして懼れのかげがある。その由つて來るところはあるのだが、あと廻しにして進む。

「駄目だね、相變らずさ」多木太一は、殆んど習慣的になつてゐる言葉を、習慣的に吐いた。

「のんきだねえ」と島田が笑つた。

「のんきといふわけでもないさ」

ちつとも仕事をせず、時々郷里へ歸つては家中をきよろ／＼見廻し、何かしら持ち出して來る。さういふ時の母や妹の顔を見るのはやつぱり辛いから、時には友人知人を襲つてなにがしかを借り出す。三十三になるまでそんなことばかり繰り返してゐる彼を、島田は、のんき、といふ言葉で意地悪く批評してゐるのだ。多木太一はしかし、大して氣にもとめなかつた。誰彼のそんな批難は、すでに、彼にとつて、蛙の面に水だつた。

「君、就職して見ないか？」

「駄目だね」

「さう云つて了へばおしまひさ。——君のは自分で駄目と決めてゐるんだから……」

「つとまりはしないよ。それは、僕みたい男を、平氣で雇つとく相手があればだけだね、そんな茶人はゐなからうよ」

「あのね」と島田は少し調子を變へて、

「今、知識階級失業者救済事業といふのを、東京市でやつてるんだよ。實は、僕がその係りなんだけどね、知識階級向きの仕事を、臨時にやるわけだよ。登録者を、適當のところへ振り向ける。はつきり云へば、責任は輕いし、のんきさ。君向きかも知れないぜ」

「ふうん」と多木太一は考へ込んだ。なるほど島田の云ふ通り、ほんとの就職と違ふから、使ふ方も使はれる方も責任は輕いだらう。互ひに縛られるところが無いから、氣樂だらう。辭めたければいつ辭めてもいいし、休みたければ休んでもいい。將來の地位の向上や昇給は望めもせず、望む氣もないのだから、なるほどのんきだらう——。

「それは、いつでも申し込めるの？」

「うん、昨日でメ切つたよ。メ切つたけど、どうせ僕の手で整理するんだから、今からだつて間に合ふ。そつと一枚差込んで置けばいいんだ。履歴書かくかい？」

「履歴書が要るのか？」

「當り前だよ、何云つてるんだ」島田は大聲で笑つた。

「困つたな、僕は履歴書の書き方なんか知らないぜ」

「書いたことないのか？」

「學院入學の時に書いた」

「呆れたね。——僕が書いてやらう。認印持つてるかい？」

「そんなもの、無いよ」

島田は、呼びリンを押した。女中がやつて來た。

「藥屋の隣りに判屋があるだらう？ 知つてるね？」

「ハイ」

「あすこへ行つて、多木といふ判があつたら買つて來ておくれ。若し無かつたら、大至急——明日までにつくつてくれるやうに頼んでくれたまへ。いいね、多木——多い木と書く」

「かしこまりました」

「木の、安物で、出來合ひがあるだらう。形はどんなのでもいい」

「ハイ」

島田が器用な手つきで履歴書を書き終つたところへ、女中が歸つて來た。出來合ひは無く、頼んで來たと云つた。

「それぢやあ、判が出來たらこれへ捺して、僕が預かつとく。一週間以内に、君のところへ勤め先の通知が行く筈だよ」

「全然君におんぶしちやつたね。いや、抱つこでおんぶだね、これは」

そこへ、細君がビールを運んで来た。

「君の初めての就職だ。前祝ひに一つ——」

「こりや、抱つておんぶ以上だよ。いつたにどういふことになるんだ」

多木太一は、上機嫌らしい聲を出したが、内心そんなに上機嫌でもなかった。島田の、自分に對する心遣ひに複雑なかげがあること、そのかげの何に由來するかが判つてゐること、それらが多木太一を、陽氣にばかりはしておかないのだつた。

多木太一は、島田の弱點を握つてゐる、と云へる。島田が、今の細君を貰ふ前、一人の女性と交渉を持つてゐた。島田の熱心さにもかかはらず、それは實を結ばなかつた。それはそれでいいのだが、島田はその女性と交渉があつた當時、酒の上で、他のつまらぬ女に、つまらぬことをしかけた。それを知つてゐるのが、今では多木一人なのだ。今では、といふのは、その時もう一人の男がゐるが、その男は、もう死んでしまつたからだ。

謂はば、酒の上の醜態である。島田ならずとも、ままありがちのことだつた。ただ、島田は、そのことの曝露を、極度に懼れてゐたのである。それは誰にも知られなかつた。多木が黙つてゐるからである。彼との間に實を結ばなかつたといふ女性も知らず了ひだ。島田の現在の細君が知らう筈はない。

さういふ多木太一を、島田は懼れてゐる。いや、多木を懼れてゐるのではない、多木に對しては、むしろ、成すこともなくぐうたらしめてゐることへの侮蔑感しか抱いてはゐないだらう。多木太一を懼れないが、多木の知つてゐる事實の曝露されることを懼れてゐるのだ。

多木が、島田にもてなされても上機嫌になり得ないのは、彼のそんな氣持が判つてゐるからだ。そん

な弱點さへ握られてゐなかつたら、彼は多木を、ただ單に輕蔑だけしてすましてゐるだらう。遊びに來たつて、上れとも云はないかも知れない。上れ位は云つたとしても、臨時就職の世話をやいたり、ビールを抜いたりはいらないだらう。

こはもてといふ奴だな——多木太一はコップを唇にあてながら、肚でにがしく笑つた。この男は、單に昔の同級生に過ぎない、友達ではない、かつてはさうだつた時期が無かつたわけでもないが——。つまり、多木太一が、就職のために履歴書を出したのは、その時だけといふわけであつた。勤め先の通知が來て、彼は三ヶ月間、牛込の區役所へ通つた。もつとも、日數にすると、一ヶ月半ぐらゐだつた。中等學校卒業、高專卒業、大學卒業と、日給が三段階になつてをり、彼は日給は最高級だつたが、仕事の能率は、最下級だつた。

この一回の經驗で、多木太一は、勤人生活といふものに、自分が無縁な人間であることを覺つた。同時に、侮蔑と懼れの複雑に入り混つた島田の舉措が厭になり、二度と彼のところへは行かなくなつた。——そんなことがあつてから、すでに二年近く經つた。

二

多木太一が芳枝と一緒にゐたのは八月の末だつたが、その時彼は、無一文で、宿無しだつた。神樂坂近くのある下宿に、三四ヶ月も宿料を溜め、その催促が急でゐたため、持物一切を置いて、宿を逃げ出したのだつた。持物といつてもロクになかつたが、全部を處分すれば、借金の埋まる程度にはあつ

た。だから、逃げ出したことは、宿にとつては迷惑ではなく、却つて好都合だったらう——さういふ氣持から、多木太一は、宿に對して負目を感じてはゐなかつた。

タオル、石鹼箱、齒ブラシ、萬年筆、岩波文庫本に手帳各一冊、それだけの小さな風呂敷包をぶら下げて多木太一は宿を出たのだつた。夏だから、身輕だつた。郷里へ歸れば身體だけは樂々と寢そべつてゐられるわけだが、心理的にうつたうしかつた。むしろ、東京に數多い友人知人の所を廻り歩いた方が氣樂だと思ふのだつた。

早稻田のグラウンド裏に住む、石井といふ若い友人のところへ、ふらりと入つていつた。そこで、多木は、芳枝を初めて見たのである。

宮原芳枝は、北陸のK市の生れ、幼時父に死なれてあとは、母親の手で、今年女學校（五年制の）も出た。父の遺したものでやつて來たので、裕福といふのでもなかつたが、さして辛い目にも遇はず、むしろ、わがままに育てられた。母は、父の後妻だつた。父と母の家格の違いから、母は、娘にさへ氣分的に一目置いてゐた。それが芳枝をわがまま娘にしたと云へるだらう。

遅生れの十九だが、五尺二寸に十四貫といふ、女にしては大柄の方で、肉づきよく、色白く、人の顔さへ見ればニコニコせずには居れぬといふた、ちだつた。學校時代は運動の選手で、そんなためか、立居ふるまひに元氣よいところがあつた。

同級の友甲斐純子が、學校を出ると共に、かねて話のあつた石井伍助と、内縁ながら一緒になり、早稻田の學生である石井につれられて上京すると、特別に親しかつた友に去られて芳枝は、急にある淋し

さを感じ出した。純子が、ただ漫然と上京しただけなら、あるひはそれほどには感じなかつたであらう。結婚と上京——この二つの華やかなものを、親しい友の上に同時に見た若い娘の感傷から、あたしも東京に出てみようかしら——さういふ氣がふと芳枝をいざなつたやうである。

東京には、芳枝のたよりになる者が、二人ゐた。腹違ひの姉、それはやがて親子ほども齡の違ふ人だが、宮原家の當主であり、一度迎へた良人を離別し、今は某女子大學校の教師をして、一人暮してゐる。年齡の差と、教養の違いから、芳枝にとつては、一寸近寄りがたい、氣づまりな姉だつた。

また、一人は、石井伍助と同じ大學の文科にゐる野々宮貞三だつた。野々宮姉弟は四人、上下が女で、貞三は長男だつた。すでに兩親のない姉弟たちは、姉が親代りをつとめ、第二人妹一人を、それぞれ學校に入れてゐた。野々宮一家と芳枝たちは、K市での住居を近くし、また末の敦子は女學校で芳枝より一級下にゐた。

東京へ出て、タイピストにでもならうかしら、不勉強なあたしでも、一年もしつかりやれば、邦文タイプぐらゐ打てるやうになれるだらう、そして——と考へてくると、芳枝は獨り顔を染めた。野々宮貞三の美しい顔が、そのおだやかな笑顔が、目の前にうかぶのだ。「まア、あたし」と、自分を無理にたしなめようとするのだが、それが虚勢に過ぎぬことは、芳枝自身が知つてゐた。東京で行暮れたとき、自分の身と心を一緒にたしなめて投げかけることの出来るのは、野々宮貞三の胸を措いて外にはない、——それは芳枝の希求であり、同時に、正確な見透しであつた。貞三との、そんなことには一つも觸れぬK市でのつき合ひから、敏感な娘の心の眼は、貞三の——僕は、あなたが僕を必要とする限り、あなたを待つてゐる——さういふ語られぬ言葉を讀みとつてゐるのだつた。